

海城発電

泉鏡花

青空文庫

「自分も実は白状をしようと思つたです。」

と汚れ垢着あかきたる制服を絡まとえる一名の赤十字社の看護員は静しずかに左右を顧みたり。

渠かれは清しんこく国の富豪柳りゆう氏の家なる、奥まりたる一室に夥多あまたの人数にんずに取囲まれつつ、椅子に懸かかりて卓つくえに向えり。

渠を囲みたるは皆軍夫なり。

その十数名の軍夫の中に一人逞たくましき漢おのこあり、屹きとかの看護員に向いおれり。これ百人長なり。海野うんのと謂いう。海野は年配三十八

九、骨太なる手足飽くまで肥えて、身の丈もまた群を抜けり。

今看護員の謂出だせる、その言を聴くと斉しく、

「何！ 白状をしようと思つたか。いや、實際味方の内情を、あの、敵に打明けようとしたんか。君。」

謂う言ややあらかりき。

看護員は何気なく、

「そうです。撲つな、蹴るな、貴下酷いことをするじゃありませんか。三日も飯を喰わさないで眼も眩んでいるものを、赤条条々にして木の枝へ釣し上げてな、銃の台尻でもって撲るです。ま、どうでしょう。余り拷問が厳しいので、自分もつい苦しうつて堪りませんから、すつかり白状をして、早くその苦痛を助りたい

と思ひました。けれども、軍隊のことに就いては、何にも知つち
 やあいないので、赤十字の方ならばくわ悉しいから、病院のことなん
 ぞ、悉しく謂つて聞かしてやつたです。が、そんなことは役に立
 たない。軍隊の様子を白状しろつて、ますます酷くさいな苛むです。実
 に苦しくつて堪らなかつたですけれども、知らないのがほんとう真実だ
 から謂えません。で、とうとう聞かさないでしまいました。が、い
 や、実に弱つたです。困りましたな、どうも支那人の野蛮なのに
 やあ。何しろ、まるでもつて赤十字なるものの組織を解さないで、
 自分等を何がなし、おんなし戦闘員と同一に心得てるです。仕方があり
 ませんな。」

とあだかも親友に対して身の上ぼなし談話をなすがごとく、渠は平氣

に物語れり。

しかるに海野はこれを聞きて、不心服なる色ありき。

「じゃあ何だな、知つてれば味方の内情を、残らず饒舌しゃべツちまう処ところだったな。」

看護員は軽かろく答えたり。

「いかにも。拷問が酷こかったです。」

百人長は憤然むっとして、

「何だ、それでも生命いのちがあるでないか、たとい肉が爛ただれようが、さ、皮が裂けようがだ、呼吸いきがあつたくらいくらいの拷問なら大抵知れたもんでないか。それに、いやしくも神州男児で、殊に戦地にある御互おたがいだ。どんなことがあるうとも、謂うまじきことを、何、

撲られた位で痛いというて、味方の内情を白状しようとする腰拔
 がどこに在るか。勿論、白状はしなかつたさ。白状はしなかつた
 に違無いが、自分で、知つてれば謂おうというのが、既に我が同
 胞うぼうの心でない、敵に内通も同おんなじ一だ。」

と謂いつつ海野は一步を進めて、更に看護員を一睨げいせり。

看護員は落着済まして、

「いや、自分は何も敵に捕えられた時、軍隊の事情を謂つては不
 可けぬ、拷問を堅忍して、秘密を守れという、訓令を請けた事も無
 く、それを誓つた覚おぼえも無いです。また全くそうでしょう、袖に赤
 十字の着いたものを、戦闘員と同おんなじ一取扱をしようとは、自分は
 じめ、恐らく貴あなた下方にしても思おも懸いはしないでしよう。」

「戦地だい、べらぼうめ。何を！ 呑気のんきなことを謂やがんでい。」

軍夫の一人にんつかつかと立かかりぬ。百人長は応揚おうように左手ゆんでを広げて遮りつつ、

「待て、ええ、屁でもない喧嘩と違うぞ。裁判だ。罪が極きまつてから罰することだ。騒ぐない。噪そうぞう々々しい。」

軍夫は黙して退きぬ。ぶつぶつ口小言くちこごと謂いつつありし、他の多くの軍夫等も、鳴なりを留とどめて静まりぬ。されどことごとく不穩の色あり。眼光鋭く、意気激しく、いずれも拳こぶしに力ちからを籠めつつ、知らず知らず肱ひじを張りて、強いて沈静を装いたる、一室にこの人数を容いれて、燈火の光冷ひややかに、殺気を籠めて風寒く、満洲の天地初夜過ぎたり。

二

時に海野は面を正し、警いましむるがごとき口くちぶり気もて、

「おい、それでは済すむまい。よしんば、吾われわれ々同胞が、君に白状

をしると謂いつたからツて、日本人だ。むざむざ饒しゃべ舌しやべるといふ法は

あるまいじやないか、骨が砂利になろうとままよ。それをそうやすやすと、知しつてれば白状したものをなんのツて、面と向むかつて吾々に謂いわれた道理か。え？ どうだ。謂いわれた義理ではなからうでないか。」

看護員は身を斜かためにして、椅子に片手を投懸なけつつ、手にせる

鉛筆を弄もてあそびて、

「いや、しかし大きにそうかも知れません。」

と片頬かたほを見せて横を向きぬ。

海野は睜みはりたる眼まなこをもて、避けし看護員の面おもてを追いたり。

「何だ、そうかも知れませんか？　これ、無責任の言語を吐いちやあ不可いぞ。」

またじりりと詰き寄りぬ。看護員はやや俯うつむ向きつ。手なる鉛筆の尖さきを嘗なめて、筒服ズボンの膝ひざに落書しながら、

「無責任？　そうですか。」

渠かれは少しも逆さからわず、はた意いに介ませる状さまも無し。

百人長おおいは大おおいに急せきて、

「ただ（そうですね）では済まん。様子に寄つてはこれ、きつと吾々に心得がある。しつかり性根を据えて返答せないか。」

「どんな心得があるのです。」

看護員は顔を上げて、屹きつと海野に眼を合せぬ。

「一体、自分が通行をしておる処を、何か待まち伏ぶせでもなすつたようでしたな。貴下方大勢で、自分を担ぐようにして、此家ここへ引込ひっこんだはどういうわけです。」

海野は今この反問に張合を得たりけむ、肩を揺ゆりて気競きおいかかれり。

「うむ、聞きたいことがあるからだ。心得はある。心得はあるが、まず聞くことを聞いてからのこととしよう。」

「は、それでは何か誰ぞの吩咐いいつけ附つけでもあるのですか。」

海野は傲然ごうぜんとして、

「誰が人に頼まれるもんか。吾おれの了りようけん簡けんで吾が聞くんだ。」

看護員はそとその耳を傾けたり。

「じゃあ貴下方ひとに、他を尋問する権利があるので？」

百人長は面を赤うし、

「轉さえするない！」

と一声高く、頭がちに一呵かしつ。驚破すわと謂わば飛とび菟かからんず、

氣勢きおい激おしき軍夫等を一わたりずらりと見渡し、その眼を看護員に

睨ねめかえ返して、

「権利は無いが、腕力じゃ！」

「え、腕力？」

看護員はひしひしとその身を擁せる浅黄の半被股引はつびももひきの、雨風に色褪あせたる、たとえば囚徒の幽霊のごとき、数個すかの物体をみまわして、秀でたる眉をひそ顰めつ。

「解りました。で、そのお聞きになろうというのは？」

「知れてる！ 先刻さつきから謂う通りだ。なぜ、君には国家という觀念が無いのか。痛いめを見るがっらいから、敵に白状をしようと思ふ。その精神が解らない。（いや、そうかも知れません）なんぞ、無責任極まるでないか。そんなぬらくらじや了見せんぞ、しつかりと返答しろ。」

とつとつ
咄々迫る百人長は太き仕込杖しこみづえを手にしたり。

「それでどう謂えば無責任にならないのです？」

「自分でその罪を償うのだ。」

「それではどうして償いましょう。」

「敵状を謂え！ 敵状を。」

と海野は少しく色解とけてどかと身重げに椅子に凭よれり。

「聞けば、君が、不思議に敵陣から帰つて来て、係りの将校が、

君の捕虜になつていた間の経歴に就いて、尋問があつた時、特に

敵情を語れという、命令があつたそうだが、どういふものか君は、

知らない、存じませんの一点張で押おつと通して、つまりそれなりで

済んだというが。え、君、二月も敵陣に居て、敵兵の看護をした

というでないか。それで、懇こんとく篤とくで、親切で、大層奴等のために

尽力をしたそうで、敵将が君を帰す時、感謝状を送ったそうだ。その位信任をされておれば、いろいろ内幕も聞いたろう、また、ただ見たばかりでも大概は知れそうなもんだ。知つてて謂わないのはどういふ訳だ。あんまり愛国心がないではないか。」

「いえ、全く、聞いたのは呻吟うめぎこえ声ばかりで、見たのは繃帶ほうたいばかりです。」

三

「何、繃帶と呻吟声、その他は見も聞きもしないんだ？
可加いかげ

減へんなことを謂え。」

海野は苛いらだ立つ胸を押おさえて、務めて平和を保つに似たり。

看護員は實際その衷ちゆうじよう情じようを語るなるべし、いささかも飾気無
く、

「全く、知らないです。謂つて利益になることなら、何秘かくすもの
ですか。またちつとも秘さねばならない必要も見出みいださないです。」
百人長は訝いぶかしげに、

「してみると、何か、まるで無神経で、敵の事情を探ろうとはし
なかつたな。」

「別に聞いてみようとも思わないでした。」

と看護員は手をその額に加えたり。

海野は仕込杖もて床をつつき、足踏あしづみして口惜くちおしげに、

「無神経極まるじやあないか。敵情を探るためには斥候せつこうや、探偵が苦心に苦心を重ねてからに、命がけで目的を達しようとして、十に八九は失敗しくじるのだ。それに最も安全な、最も便利な地位にあつて、まるでうつつちゃつて、や、聞こうとも思はない。無、無神経極まるなあ。」

と吐息して慨然がいぜんたり。看護員うなじは頸なを撫なでて打傾なき、
 「なるほど、そうでした。閑ひまだとそんな処まで気が着いたんでしようけれども、何なんしろ病傷兵の方にばかり気を取られたので、ぬかつたです。ちつとも準備が整わないで、手当が行届ひまかないもんですから随分繁忙を極めたです。五分と休ひまむ間もない位で、夜よの目も合わさないで尽力したです。けれども、器具も、薬品も不完

全なので、満足に看護も出来ず、見殺にしたのが多いのですもの、敵情を探るなんて、なかなかどうしてそこどころまで、手が廻るものですか。」

「といまだ謂いも果ざるに、

「何だ、何だ、何だ。」

海野は獅子吼をなして、突立ちぬ。

「そりや、何の話だ、誰に対するどいつの言だ。」

と囁着かんずる語勢なりき。

看護員は現在おのが身のいかに危険なる断崖の端に臨みつつあるかを、心着かざるものごとく、無心——否むしろ無邪氣——の体にて、

「すべてこれが事実であるのです。」

「何だ、事実！　むむ、味方のためには眼も耳も吝おしんで、問わず、聞かず、敵のためには粉骨碎身をして、夜の目も合わさない、呼吸いきもつかないで働いた、それが事実であるか！　いや、感心だ、恐れ入った。その位でなければ敵から感状を頂戴する訳にはゆかんな。道理もつともだ。」

と謂懸けて、夢見るごとき対あいて手の顔を、海野はじつと瞻みまもりつつ、嘲あざみ笑いて、声太く、

「うむ、得難い豪傑だ。日本の名誉であろう。敵から感謝状を送られたのは、恐らく君を措おいて外にはあるまい。君も名誉と思うであろうな。えらい！　実にえらい！　国の光だ。日本の花だ。」

吾々もあやかりたい。君、その大事の、いや、御秘蔵のものではあろうが、どうぞ一番、その感謝状を拝ましてもらいたいな。」
と口は和らかにものいえども、胸に満たる不快の念は、包むにあまりて音に出でぬ。

看護員は異議もなく、

「確かありましたツけ、お待ちなさい。」

手にせる鉛筆を納るとともに、衣兜の裡をさぐりつつ、

「あ、ありました。」

と一通の書を取り出して、

「なかなか字体がうまいです。」

無雑作に差出して、海野の手に渡しながら、

「裂いちやあいけません。」

「いや、謹んで、拝見する。」

海野はことさらに感謝状をおしいただ押し戴ただき、書面を見る事久しかりしが、やがてさらさらと繰広げて、両手に高く差さしかぎ翳しつ。声を殺し、鳴なりを静め、片唾かたずを飲みて群むらりたる、多数の軍夫に掲げ示して、

「こいつを見い。貴様達は何と思う、礼手紙だ。可いいか、支那人チャンチャンから礼をいつて寄越よこした文だぞ。人間は正直だ。わけもなく天窓あたまを下げて、お辞義をする者は無い。殊に敵だ、吾々の敵たる支那人だ。支那人が礼をいつて捕虜とりこを帰して寄越したのは、よくよくのことだと思え！」

いうことば半ばにして海野はまた感謝状を取直し、ぐるりと押廻うしろして後背なる一団の軍夫に示せし時、戸口に丈長たかき人物あり。頭巾ずきん黒く、外套がいとう黒く、面を蔽おもてい、身体からだを包みて、長靴なががを穿うがちたるが、わずかに頭こうべを動かして、屹きつとその感謝状に眼を注ぎつ。濃こまやかなる一脉みやくの煙は渠かれの唇くちびる辺を籠めて渦巻きつつ葉巻かおりの薫高たかかりけり。

四

百人長は向直りてその言ことばを続けたり。

「何と思う。意気地いくじもなく捕虜とりこになつて、生命いのちが惜おしさに降参して、

味方のことはうっちゃってな、支那人チャンチャンの介抱をした。そのまた尽力というものが、一通りならないのだ。この中にも書いてある、まるで何だ、親か、兄弟にでも対するように、恐ろしく親切を尽してやってな、それで生命いのちを助かつて、おめおめと帰って来て、あまつさえこの感状を戴いた。どうだ、えらいでないか貴様達なら何とする？」

といまだ謂いもはてざるに、満堂たちまち黙を破りて、哄どっと諸も声ろいをぞ立てたりける、喧けんごう轟名状すべからず。国賊逆徒、売国奴、殺せ、撲なぐれと、衆口一斉熱罵恫喝ねつぱどうかつを極めたる、思い思いの叫声は、雑音意味も無き響ひびきとなりて、騒然としてかまびすしく、あわや身の上ぞと見る眼危あやうき、ただ単身みひとつなる看護員は、冷々然

として椅子に恚^よりつ。あたりを見たる眼^{まくぼり}配^りは、深夜時計の輾^{きし}る時、病室に患者を護りて、油断せざるに異ならざりき。看護員に迫害を加うべき軍夫等の意気は絶頂に達しながら、百人長の手を掉^ふりて頻^{しき}りに一同を鎮むるにぞ、その命なきに前^{さき}だちて決して毒手を下さざるべく、かねて警^{いまし}むる処やありけん、地踏^{じだんだふ}鞞^{だふ}踏^ふみてたけり立つをも、夥^{なかま}間同志が抑制^{こぶし}して、拳^{こぶし}を押え、腕^{やく}を扼^{やく}して、野分^{わけ}は無事に吹去りぬ。海野は感謝状を巻き戻し、卓^{ていぶる}子の上に押^お遣^{しや}りて、

「それでは返す。しかしこの感謝状のために、血のある奴等があるに騒ぐ。殺せの、撲れのという気組だ。うむ、やつぱり取っておくか。引裂^{ひっさ}いて踏んだらどうだ。そうすりやちつとあ念ばら

しにもなつて、いくらか彼奴らあいつが合点しよう。そうでないと、あれでも御国みくにのためには、生命いのちも惜まおしない徒てだから、どんなことをしようも知れない。よく思案して請取るんだ、可いか。」

耳にしながらか看護員は、事もなげに手に取りて、海野が言ことの途切れざるに、敵より得たる感謝状は早くも衣兜かくしに納まりぬ。

「取つたな。」と叫びたる、海野の声の普通たならざるに、看護員は怪あやしむごとく、

「不可いけないですか。」

「良心に問え！」

「やましいことはちつともないです。」

いと潔く謂放ちぬ。その面めん貌ぼうの無邪気なる、その謂うことの

淡泊なる、要するに看護員は、他の誘惑に動かされて、胸中その是非に迷うがごとき、さる心弱きものにはあらず、何等か固き信仰ありて、たといその信仰の迷えるにもせよ、断々乎一種他の力のいかんともし難きものありて存せるならむ。

海野はその答を聞くごとに、呆れもし、怒りもし、苛立ちもしたりけるが、真個天真なる状さま見えて言を飾るとは思われざるにぞ、これ実に白痴者なるかを疑いつつ、一応試こころみに愛国の何たるかを教えみんとや、少しく色を和やわらげる、重きものいいの渋しぶりがちにも、「やましいことがないでもあるまい。考えてみるが可い。第一敵のために虜とりこにされるといふがあるか。抵抗してかなわなかつたら、なぜ切腹をしなかつた。いやしくも神州男児だ、腸はらわたつかを掴み出して、

敵のしやツ面^{つら}へたたきつけてやるべき処だ。それも可^{いい}、時と場合で捕^{とら}われないにも限らんが、撲^うられて痛いからつて、平気で味方の内情を白状しようとは、呆^{はて}れ果た腰拔だ。それにまだ親切^チに支^チヤンチャン
那人の看護をしてな、高慢らしく尽力をした吹^{ふい}聴^{ちよう}もないもんだ。のみならず、一旦恥辱^{ちよく}を蒙^{こう}つて、吾々同胞の面^{つら}汚^{よご}をしていながら、洒^{しやあ}亜^あつくで帰^{かえ}つて来て、感状^{かんじやう}を頂^{たか}きは何^{なに}という心得だ。せめて土産に敵情でも探^{たづ}つて来れば、まだ言訳もあるんだが、刻苦^{こくく}して探^{たづ}つても敵の用心^{しんしん}が厳^{げん}しくつて、残念^{ぜんぜん}ながら分^わらなかつたというならまだも恕^{じよ}すべきであるに、先に将校^{しやうがう}に検^{しら}べられた時^{とき}も、前^ま刻^{さつ}吾^{われ}が聞^きいた時^{とき}も、いいようもあるうものを、敵情^{ていきん}なんざ聞^きこうとも、見^みようとも思^{おも}わなかつたは、実に驚^{おど}く。しかも敵兵

の介抱が急がしいので、そんなことあ考えてる隙ひまもなかつたなんぞと、憶おくめん面もなく謂うごときに至つては言語同断と謂わざるを得ん。国賊だ、売国奴だ、疑うたがつてみた日にやあ、敵に内通をして、我軍の探偵に來たのかも知れない、と言われた処で仕方がないぞ。

五

「さもなければ、あの野蛮な、残酷な敵がそうやすやす捕虜とりこを返す法はない。しかしそれには証拠がない、強しいて敵に内通をしたとは謂わん、が、既に国民の国民たる精神の無い奴を、そのままに

して見遁^{みの}がしては、我軍の元氣の消長に關するから、きつと改悟の点を認むるか、さもなくば相當の制裁を加えなければならん。勿論軍律を犯したというでもないから、將校方は何の沙汰をもせられなかつたのであろう。けれども、吾々父母妻子をうつつやつて、御國のために尽そうという愛國の志士が承知せん。この室に居るものは、皆^みな君の所置振^{ぶり}に慊^{けん}焉^{えん}たらざるものがあるから、將校方は黙許なされても、そんな国賊は、きつと談じて、懲戒を加ゆるために、おのおの決する処があるぞ。可^いか。その惡^{にく}むべき感謝状を、こういつた上でも、裂いて棄てんか。やつぱり疚^やましいことはないが、ちよつとも良心^{とが}が咎^{とが}めないか、それが聞きたい。ぬらくらの返事をしちやあ不可^{いかん}ぞ。」

看護員は傾聴して、深くその言を味いつつ、默然として身動きだもせず、やや猶予ためらいて言わざりき。ものい

こなたはしたり顔に附入りぬ。

「きつと責任のある返答を、此室ここに居る皆みんなに聞かしてもらおう。」
謂いいつつ左右みまわを眺みまわしたり。

軍夫の一人にんは叫いび出だせり。「先生。」

渠等かれらは親方といわざりき。海野は老壮士なればなり。

「先生、はやくしておくんなせえ。いざこざは面倒めんぼうでさ。」
「撲なぐつちまえ！」と呼ばよわるものあり。

「隊長、おい、魂を据えて返答しろよ。へん、どうするか見やあがれ。」

「腰拔め、口いきくが最後だぞ。」

と口々にまたひしめきつ。四五名の足のばたばたと床板を踏鳴らす音ぞ聞こえたる。

看護員は、海野がいわゆる腕力の今ははやその身に加えられるべきを解したらむ。されども渠はいささかも心に疚やましきことなかりけむ、胸苦しきけぶり気振もなく、静しずかに海野に打向いて、

「ちつとも良心に恥じないです。」
軽く答えて自若たりき。

「何、恥じない。」
と謂返して海野は眼まなこを睜みはりたり。

「もう一度、きつとやましい処はないか。」

看護員は微笑ほほえみながら、

「繰返すに及びません。」

その信仰や極めて確乎かつこたるものにてありしなり。海野は熱し詰こぶしめて拳を握りつ。容易たやすくはものも得えいわでただ、ただ、渠にらを睨にらまえ詰めぬ。

時に看護員は従しやうよう容、

「戦闘員とは違います、自分をお責めなさるんなら、赤十字社の看護員として、そしておはなしが願ねがひたいです。」

謂いひ懸かけて片頬笑みつ。

「敵の内情を探るには、たしか軍事探偵というのがあある筈はずです。一体戦闘力のないものは敵に抵抗する力がないので、遁にげらるれ

ば遁げるんですが、行^やり損なえばつかまるです。自分の職務上病傷兵を救護するには、敵だの、味方だの、日本だの、清国だのという、さような名称も区別も無いです。ただ病傷兵のあるばかりで、その他には何にもないです。ちようど自分が捕^{とりこ}虜になつて、敵陣に居ました間に、幸い依頼をうけましたから、敵の病兵を預りました。出来得る限り尽力をして、好結果を得ませんと、赤字の名折^{なわれ}になる。いや名折は構わないでもつまり職務の落度となるのです。しかしさつきもいいます通り、我軍と違つて実に可哀想だと思ひます。気の毒なくらい万事が不整頓で、とても手が届かないので、ややともすれば見殺しです。でもそれでは済まないので、大變に苦勞をして、ようよう赤十字の看護員という躰面だ

けは保つことが出来ました。感謝状はまずそのしるしと書いてい
いようなもので、これを国への土産にすると、全国の社員は皆満
足に思うです。既に自分の職務さえ、辛うじて務めたほどのもの
が、何の余裕があつて、敵情を探るなんて、探偵や、斥候の職
分が兼ねられます。またよしんば兼ねることが出来るにしても、
それは余計なお世話であるです。今貴下あなたにお談し申すことも、お
検しらべになつて将校方にいったことも、全くこれにちがいはないの
でこのほかにいうことは知らないです。毀誉褒貶きよほうへんは仕方がない、
逆賊でも国賊でも、それは何でもかまわないです。ただ看護員で
さえあれば可い。しかし看護員たる躰面を失つたとしてもいうことな
ら、弁解も致しませぬ、罪にも服しませぬ、責任も荷になうです。けれど

も愛国心がどうであるの、敵愾心てきがいしんがどうであるのと、さようなことには関係しません。自分は赤十字の看護員です。」

と淀よどみなく陳のべたりける。看護員のその言語には、更に抑揚と頓挫とんざなかりき。

六

見る見る百人長は色激して、砕けよとばかり仕込杖を握り詰めしが、思うこと乱麻胸らんまを衝つきて、反駁はんぱくの緒いとぐちを発見みいだし得ず、小鼻ひげと、髯ひげのみ動かして、しらせ返りて見えたりける。時に一人にんの軍夫あり、

「畜生、好きなことを謂つてやがらあ。」

声高に叫びざま、足疾に進出て、看護員の傍に接し、

その面を覗きつつ、

「おい、隊長、色男の隊長、どうだ。へん、しらばくれはよしてくれ。その悪済ましが気に喰わねえんだい。赤十字社とか看護員とかつて、べらんめい、漢語なんかつかいやあがつて、何でえ、駄よく言抜けようとしたつて駄目だぜ。おいらアみんな知てるぞ、間拔めい。へん蓄生、支那の捕虜になるようじゃあとても日本で色の出来ねえ奴だ。唐人の阿魔なんぞに惚れられやあがつて、この合の子め、手前、何だとか、彼だとかいうけれどな、南京に惚れられたもんだから、それで支那の介抱をしたり、鼻負をした

りして、内幕を知つててもいわねえんじやあねえか。こう、おいらの口は浄玻璃じようはりだぜ。おいらあしよつちゆう知つてるんだ。おいみんな皆聞かつし、初手はな、支那人の金満が流ながれだま丸くらを啖みちばつて路みちば傍たに僵たおれていたのを、中隊長様が可愛想だつてえんで、お手当をなすつてよ、此奴こいつにその家まで送らしておやんなすつたのがはじまりだ。するとお前めえその支那人を介抱して送り届けて帰りしなに、支那人の兵隊が押込んだらう。面くらいやアがつつつかまる処をな、金満やっこの奴さん恩儀を思つて、無性に難ありがた有がつてる処だから、きわどい処を押隠して、ようよう人目を忍ばしたが、大勢押込んでいるもんだから、秘かくしきれねえでどうどう奥の奥の奥の奥の、女むすめの部屋へ秘したのよ。ね、隠れて五日ばかり対さしむか向い

で居るあいだに、何でもその女が惚れたんだ。無茶におツこちた
と思ひねえ。五日目に支那の兵が退いてく時つかめえられてしよ
びかれた。何でもその日のこつた。おいら五六人で宿營地へ急ぐ
途中、酷く吹雪く日で眼も口もあかねえ雪中に打倒れの、半
分埋まつて、ひきつけていた婦人があつたい。謂つてみりや支那
人の片割ではあるけれど、婦人だから、ねえ、おい、構うめえ
と思つて焚火であつたためてやると活返つた李花てえ女で、此奴
がエテよ。別離苦に一目てえんでたつた一人駈出してさ、吹雪僵
になつたんだとよ。そりや後で分つたが、そんな時あ、おいらツち
が負つて家まで届けてやつた。その因縁でおいらちよいちよい
父親の何とかてえ支那の家へ出入をするから、悉しいことを知つ

てるんだ。むすめ女はな、ものずきじやあねえか、この野郎が恋しいと
 って、それつきり床とこづつ着いてよ、どうだい、この頃じやもう湯も、
 水も通らねえツさ。父親おやじなんざ氣を揉もんで銃てつぽうきざ創つもまだすつか
 りよくならねえのに、此奴こいつの音信たよりを聞こうとっつて、旅団本部へ日
 参だ。だからもう皆みんながうすうす知ってるぜ。つい隊長様なんぞの
 お耳へ入って、御存じだから、おい奴さん。お前めえお検しらべの時もその
はなしお談話をなすつたろう。ほんによ、お前がそんなえな腰拔たあ知
 らねえから、勿もつてえ体ねえ、隊長様までが、ああ、可哀想だ、その
むすめ女の父親とか眼を懸けてつかわせとおっしゃらあ、恐おそしい冥伽みょうが
 だぜ。お前そんなことも思わねえで、べんべんと支那兵チャンチャンの介抱
 をして、お礼をもらって、恥かしくもなく、のんこのしやあで、

唯^{ただいま}今帰^きつて来^きはどういう了見だ。はじめに可哀想だと思つたほど、憎^{にく}くてならねえ。支那の探偵^{いぬ}になるような奴あ大和魂を知らねえ奴だ、大和魂を知らねえ奴あ日本人のなかまじゃあねえぞ、日本人のなかまでなけりや支那人も同^{おんなじ}一だ。どてツ腹あ蹴破つて、このわたを引ずり出して、噛^{かみつぶ}潰^{つぶ}して吐出^{ていぶ}すんだい！」

「そこだ！」と海野は一喝して、はたと卓^{ていぶ}子を一打^{うち}せり。かかり、熱罵^{ねつば}を極^{ごく}めて威嚇^{いかく}しつ。

楚歌^{そか}一身^{あつま}に聚^{あつ}りて集合^{あつ}せる腕力^{あつ}の次第^{あつ}に迫^{あつ}るにも関^{あつ}わらず眉宇^{びう}一点^{あつ}の懸念^{あつ}なく、いと晴々^{あつ}しき面色^{あつ}にて、渠^{あつ}は春昼^{あつ}寂^{あつ}たる時^{あつ}、無^{あつ}聊^{あつ}に堪^{あつ}えざるものごとく、片膝^{あつ}を片膝^{あつ}にその片膝^{あつ}を、また

片膝に、交る交る投懸けては、その都度靴音を立つるのみ。胸中おのずから閑あるごとし。

蓋しけだ赤十字社の元素たる、博愛のいかなるものなるかを信ずること、渠のごとくにあらざるよりは、到底これ保ち得難き度量ならずや。

「そこだ。」と今卓ていぶる子を打てる百人長は大に決する処ありけむ、屹きつと看護員に立たちむか向いて、

「無神経でも、おい、先刻さつきからこの軍夫の謂うたことは多少耳へ入ったろうな。どうだ、衆目の見る処、貴様は国体のいかんを解さない非義、劣等、怯きようど奴である、国賊である、破廉恥はれんち、無氣力の人外である。皆みんなが貴様をもつて日本人たる資格の無いものと断

定したが、どうだ。それでも良心に恥じないか。」

「恥じないです。」と看護員は声に応じて答えたり。百人長は頷うなずきぬ。

「可よし、改めて謂え、名を聞こう。」

「名ですか、神崎愛三郎。」

七

「うむ、それでは神崎、現在居る、ここは一体どこだと思うか。」

海野は太いたくあらたまりてさもものありげに問懸けたり。問われ
て室内みまわを眺しなから、

「さよう、どこか見覚えているような気持もするです。」

「うむ分るまい。それが分つていさえすりや、口広いことは謂えないわけだ。」

顔に苔こけむしたる髯ひげを撫でつつ、立ちはだかりたる身の丈豊かに神崎を瞰みお下ろしたり。

「ここはな、柳が家だ。貴様に惚れている李花の家だぞ。」

今経歴を語りたりし軍夫と眼と眼を見合わして二人はニタリと微笑ほほえめり。

神崎は夢の裡うちなる面おももち色にてうつとりとその眼まなこを睜みはりぬ。

「ぼんやりするない。柳が住居すまいだ。女の家むすめだぞ。聞くことがありやどこでも聞かれるが、わざとここん処ひっぱへ引張つて来たのには、

何か吾々に思う処がなければならぬ。その位なことは、いくら無神経な男でも分るだろう。家族は皆追出してしまつて、李花は吾々の手の内のものだ。それだけ予め断つておく、可か。

さ、こう断つた上でも、やっぱり看護員は看護員で、看護員だけのことをさえすれば可、むしろ他のことはしない方が当前だ。敵情を探るのは探偵の係で、戦にあたるものは戦闘員に限る、かかりたかいたかいうてみれば、敵愾心てきがいしんを起すのは常業のない閑人ひまじんで、進で国家に尽すのは好事家ものずきがすることだ。人は自分のすべきことをさえすれば可、吾々が貴様を責めるのも、勿論のこと、ひまだからだ、と煎じ詰めた処せんそういうのだな。」

神崎は猶予たためらわで、

「ぎよう、自分は看護員です。」

この冷かなる答を得て百人長は決意の色あり。

「しつかり聞こう、職務外のことは、何にもせんか！」

「出来ません。余裕があれば綿織糸めんざんしを造るです。」

応答はこれにて決せり。

百人長はいうこと尽きぬ。

海野は悲痛の声を挙げて、

「駄目だ。殺しても何にもならない。可よし、いま一ツの手段を取る

う。権！ 吉！ 熊！ 一件だ。」

声に応じて三名の壮わかもの伎は群を脱して、戸口に向えり。時に出

口の板戸を背にして、木像のごとく突立つったちたるまま両手を衣兜かぶしに

ぬくめつつ、身動きもせで煙草をのみたるかの真黒なる人物は、靴音高く歩を転じて、渠等を室外に出しやりたり。三人は走り行きぬ。走り行きたる三人の軍夫は、二人左右より両手を取り、一人後より背を推して、端麗多く世に類なき一個清国の婦人の年少なるを、荒けなく引立て来りて、海野の傍に推据えたる、李花は病床にありしなる、同じ我家の内ながら、渠は深窓に養われて、浮世の風は知らざる身の、しかくこの室に出でたるも恐らくその日が最初ならむ、長き病に倅裏れて、寝衣の姿なよなく、簪の花も萎みたる流罪の天女憐むべし。

「国賊！」

と呼懸けつ。百人長は猿臂を伸ばして美しき犠牲の、白き頸

を搔^か掴^{つか}み、その面^{おもて}をば仰^のけざまに神崎の顔に押向けぬ。

李花は猛獸に手を取られ、毒蛇に膚^{はだ}を絡^{まと}われて、恐怖の念もあらざるまで、遊魂半ば天に朝して、夢現の境にさまよいながらも、神崎を一目見るより、やせたる頬をさとあかめつ。またたきもせで見詰めたりしが、にわか^にに総の身を震わして、

「あ。」と一声血を絞れる、不意の叫声に驚きて、思わず軍夫が放てる手に、身を支えたる力を失して後居^{しりい}にはたと僵^{たお}れたり。

看護員は我にもあらで衝^つとその椅子より座を立ちぬ。

百人長は毛脛^{けすね}をかか^かけて、李花の腹部をむずと踏^ふまえ、じろりと此方^{こなた}を流眊^{しりめ}に懸^かけたり。

「どうだ。これでも、これでも、職務外のことをせねばならない

必要を感じんか。」

同時に軍夫の一団はばらばらと立かかりて、李花の手足をおしふ圧伏せぬ。

「国賊！ これでどうだ。」

海野はみずから手を下ろして、李花が寝衣の袴はかますその裾をびりりとはつんざ裂けり。

八

時にかの黒衣長身の人物は、ハタと煙管きせるを取落しつ、其方そなたを見向ける頭巾うちの裡うちに一双まなこの眼爛らん々たりき。

あわれ、看護員はいかにせしぞ。

おもて
面の色は変えたれども、胸中無量の絶痛は、少しも挙動に露わ
さで、渠はなおよく静を保ち、おもむろにその筒服ズボンを払い、頭髪
のややのびて、白き額に垂れたるを、左手ゆんでにやおら搔上げかきあつつ、
卓つくえの上に差置きたる帽を片手に取ると齊ひとしく、肅然と身を起して、
「諸君。」

とばかり言いすてつ。

海野と軍夫と、軍夫と、軍夫と、軍夫と、軍夫の隙ひまより、真まっし
白く細き手の指の、のびつ、屈かがみつ、洩もれたるを、わずかに一
目見たるのみ。靴音かろ軽く歩を移して、そのまま李花に辞し去りた
り。かくて五分時を経たりし後のちは、失望したる愛国の志士と、及

びその腕力と、皆疾く室を立去りて、暗澹たる孤燈の影に、李花のなきがらぞ蒼かりける。この時まで目も目を放たで直立したりし黒衣の人は、潤歩坐中に動き出て、燈火を仰ぎ李花に俯して、嚴然として椅子に凭り、卓子に片肱附きて、眼光一閃鉛筆の尖を透し見つ。電信用紙にサラサラと、

月 日 海城発

予は目撃せり。

日本軍の中には赤十字の義務を完して、敵より感謝状を送られたる国賊あり。然れどもまた敵愾心のために清国の病婦を捉えて、犯し辱めたる愛国の軍夫あり。委細はあとより。

じよん、べるとん

英国ロンドン府、アワリー、テレグラフ社へんしゅうゆき編輯行

明治二十九（一八九六）年一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成²」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年4月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 別巻」岩波書店

1976（昭和51）年3月26日第1刷発行

初出：「太陽 第二巻第一號」

1896（明治29）年1月5日発行

※○内の編集者による注記は省略しました。

※誤植を疑った箇所を、底本の親本の表記にそって、あらためました。

入力：日根敏晶

校正：門田裕志

2016年7月31日作成

2016年9月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

海城発電

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>